WebCT 利用の異文化コミュニケーションクラス

立命館大学　野澤和典
nozawa@ec.ritsumei.ac.jp

1.はじめに

本学では、2001 年度の試験的な運用を踏まえ、2002 年度よりコース管理コースウエア WebCT[1]を全学的に導入し、オンライン・シラバスの統一やその公開に役立っており、情報システム課により適宜ワークショップが開催され、多くの教員が利用してきている。いくつかあるツールのうちで特に電子掲示板（BBS）を利用する利点は、同期的、非同期的コミュニケーションのいずれかのスタイルで、利用者同士で情報や意見の交換・共有ができることであり、個々のモチベーションを高めながら目標とする学習を促進できることにある。本稿では 2002 年度後期に開講された BKC 副専攻科目の一つ「異文化コミュニケーション」クラスでの教育実践の結果について、その利用の目的と方法、成果、問題点等を考察する。

2.クラスの概要

本クラスは経済学部および経営学部の２回生以上の学生で、卒業単位数を修得しているものの、さらに英語関連科目を履修して、知識や技能を高度化する目的で提供されるものの一つである。卒業に必要な単位の「自由選択」分野の単位としても認定される「ビジネス英語コミュニケーションコース」という BKC 副専攻科目[2]の一つであり、レベルごとに３クラス開講された「異文化コミュニケーション」[3]の一つでもある。筆者が担当したクラスの学生たちの英語力は、３クラスのうち一番低い Upper Intermediate に属するレベルであったが、講義はもちろんのこと、ビデオ視聴や配布資料は基本的にすべて英語のもので実施した。

視聴させたビデオは筆者が独自に録画したもの（BBC Documentary Programs on Japan や Indian Caste System 等）や市販教材(Cold Water on American vs. French Business Culture 等)であったが、視聴後の討議を「電子掲示板」を利用することにより、全員が積極的な参加を余儀なくされ、感想を含めた意見交換をした。カバーされたトピックだけでなく、「異文化コミュニケーション」に関わる内容のものとし、PowerPoint を使ったプレゼンテーションも実施し、学生同士での内容、プレゼン方法、PowerPoint ファイルの作成技術をそれぞれ評価させ、その結果を最終的な成績評価に一部加えた。

登録者数は当初 23 名（男性 12 名、女性 11 名）であったが、男性 1 名が途中で離脱した。さらに男女 1 名ずつの２名（9.1）が成績不良により、単位を取得できなかったが、平常点評価を基準とした最終的な成績は 6 名（27.27%）が A、7 名（31.82%）が B、7 名（31.82%）が C という結果となった。授業回数は、2002 年度後期においては 14 回[4]で、学生たちの出席率の平均は、89.8％であり、無遅刻無欠席者はわずか 4 名（18.18%）しかいなかったが、おおよそ予想された範囲内のレベルと思われる。

3. WebCT 利用の目的と方法

インストールされているバージョンの WebCT は必ずしも万能なツールではなく、使い勝手がいいコースウエアとは言えないが、本クラスでは、「電子メール」、「電子掲示板」、「講義レジュメ（ハイパーリンク集）」を主として利用した。その他には、「オンライン・シラバス」を提供する以外に「小テスト」も作成し実施したり、「Chat」機能も設定し、実践できるが、本クラスでは利用しなかった。「電子メール」の利用も、あくまでも課題に基づいた情報検索のサマリー・レポートの提出用に利用した２回だけであった。講義レジュメは、各種デジタルデータとリンクを張り表示したり、ファイルをダウンロードさせたりできるが、トピックごとに関連資料のインターネット・サイトを紹介することが主であった。（図１参照）

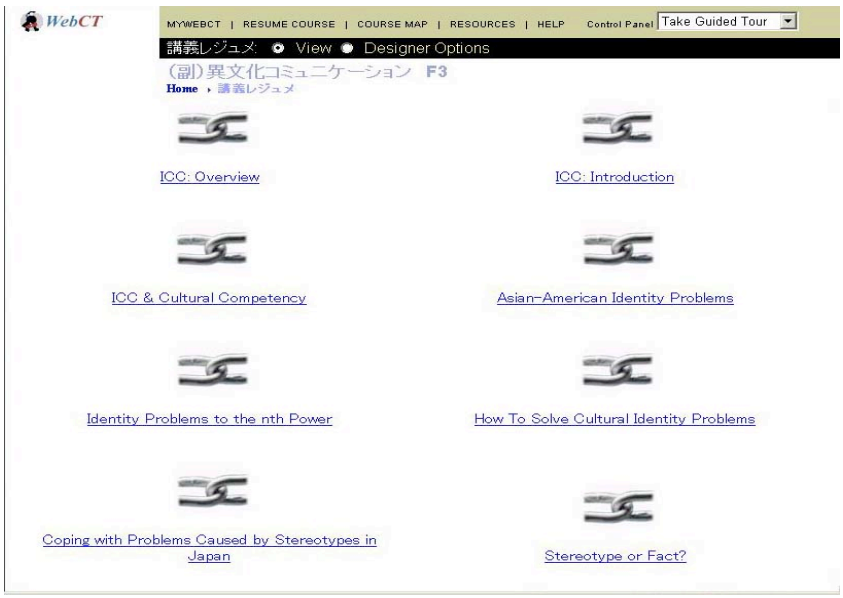

図１　講義レジュメの一部

一方、「電子掲示板」は、その特徴でもある、同時的・非同時的なコミュニケーションのためのツールでもあるので、特定の課題に関する討議の場を提供するばかりでなく、ビデオ視聴後の意見交換などに全 14 週のうち 10 回利用した。▼印は通常課題を示す Initial Messages に対して Secondary Messages があることを示し、わずかながら掲示板の一種であるツリー状のインターフェイスとなっている。（図２参照）

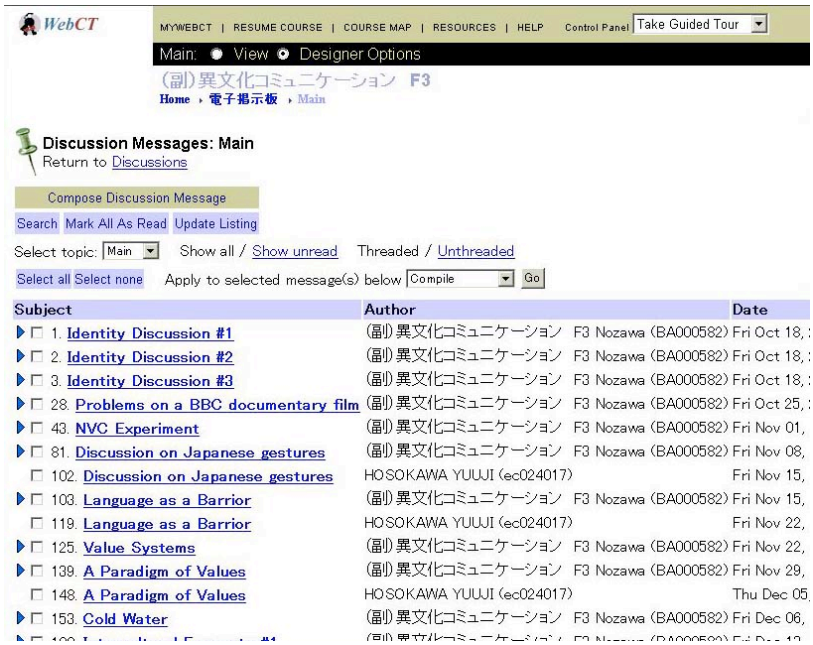

図２　電子掲示板の表示画面の一部

4.成果と問題点

表 1 および図 3～図 5 から明白なように、トピックごとの課題への投稿は、Initial Messages と Secondary Messages の２種類に分けられる。Initial Messages が合計８つの課題に対してのものであり、途中で離脱した学生 1 名分を除いているが、平均提出数は 5.77 で、63.64%の学生たちが平均を上回った数を提出した。Secondary Messages は、Initial Messages に対するレスポンスの意味であり、本人以外のメッセージを読んで、感想を述べたり､批評をしたりするものである｡Initial Messages と同数あるいはそれ以上の Secondary Messages

を提出した学生は 10 名で、全体の 45.46%と半数以下であったが、平均提出数は 6.09 であった。とかく critical thinking の力をつけなければならないとされる大学生たちの中で、これらの数字が示す通り、まだまだ異文化問題への意識レベルが低く、訓練が不可欠であることを示す実践結果となった。間接的・受動的な異文化接触が多い日本で生活をしている学生たちであることを考慮しても残念な結果となった。また、提出された英語自体も Word を使っての文法やスペルのチェックも不十分ながら指導したが、基本的な語彙数の少なさや文法力の弱さが目立っていた上に論理的思考の弱さを浮き彫りにする表現も多かった。しかし、正しい英語での論理的な表現が不十分でも、全員が自分の意見を英語で書いて意見交換をするという場を WebCT により提供することのメリットが大きいと思われる。

Initial Messages	Secondary Messages	I/S
4	7	1.75
5	4	0.8
7	8	1.14286
6	11	1.83333
7	7	1
4	6	1.5
8	1	0.125
8	9	1.125
2	4	2
7	7	1
7	6	0.85714
7	10	1.42857
9	7	0.77778
6	6	1
6	5	0.83333
4	4	1
8	6	0.75
7	9	1.28571
3	5	1.66667
3	4	1.33333
2	2	1
7	6	0.85714

表１　Initial Messages と Secondary Messages 数

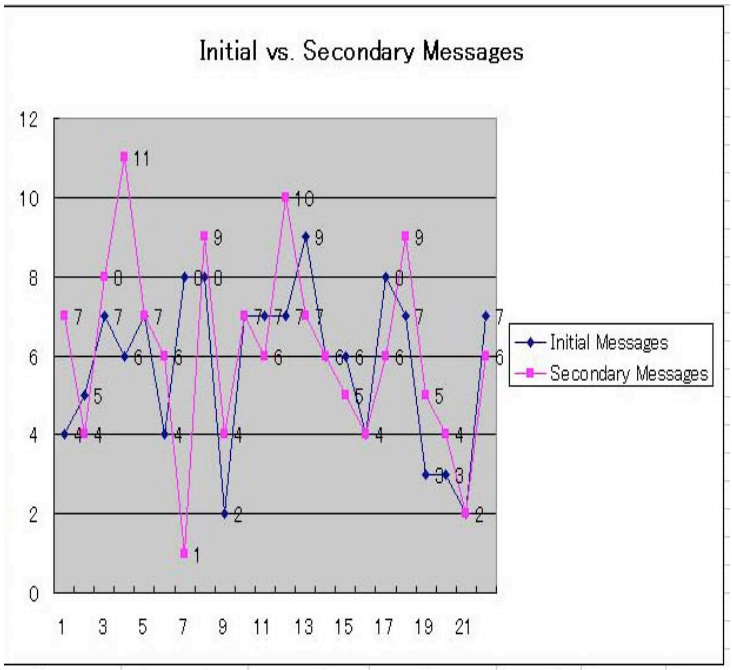

図３　Initial Messages と Secondary Messages の比較

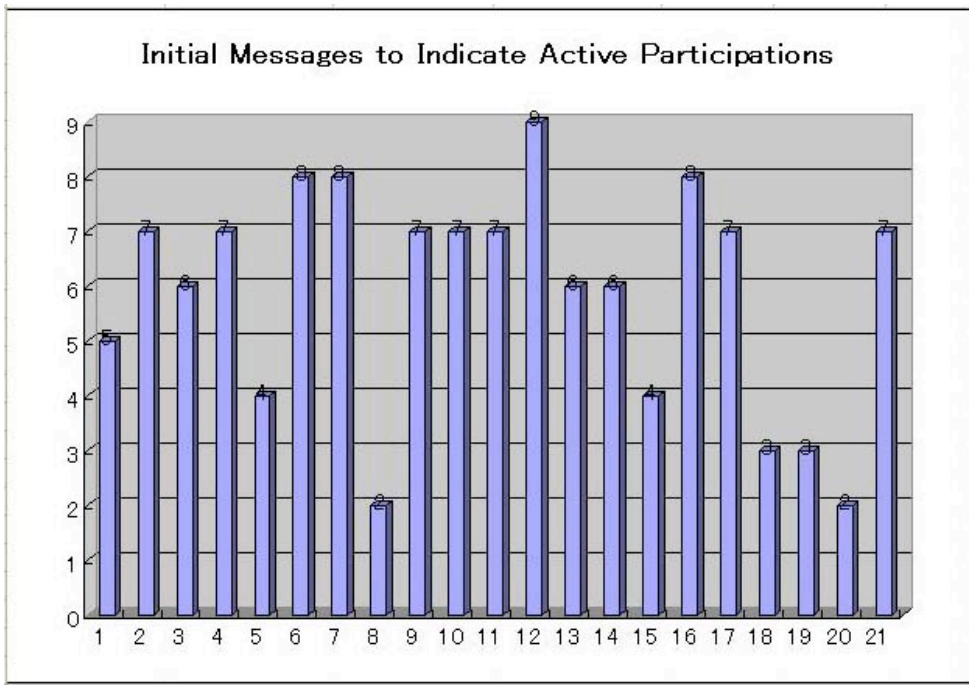

図４　課題に対する学生ごとの Initial Messages 数

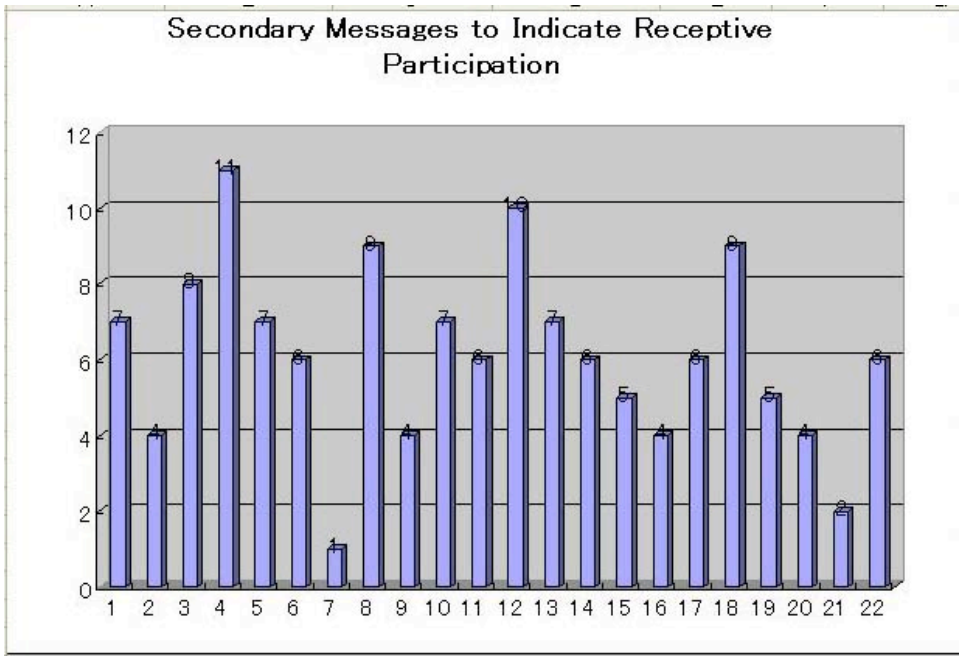

図５　課題に対する学生ごとの Secondary Messages 数

5.おわりに

個人的には 2002 年度以降も担当する学部レベルのすべての CALL(Computer Assisted Language Learning)クラス（2003 年度前期では英語 4 および英語 12）や大学院クラス（言語情報学 IV）で WebCT を利用してきているが、これまで同様限定したツールのみを利用している。その大きな理由は、やはり使い勝手の悪さが原因である。しかし、担当するクラスに登録された学生たちとのコミュニケーションだけに限定され、学生同士の、あるいは教師と学生とのより頻度の高い有益な情報交換やオンライン討議が生じ、よりインターラクテイブな教育・学習活動が展開できるメリットがあるからである。本学では現在、WebCT に取って代わるコースウエアも模索中であるが、大規模大学での利用条件に最適なものはまだ見つかっていない。

---

[1] 1995 年にカナダの The University of British Columbia で産声を上げた WebCT は、北米を中心に世界 80 ヶ国の 2600 を超える機関で、14 の言語で利用されてきている。日本語版は梶田将司名古屋大学助教授のグループにより開発され、WebCT キャンパスエディション 3.8.3 が株式会社エミットジャパン(http://www.emit-japan.com/)により販売されている。日本 WebCT ユーザ会(http://www.webct.jp/)も創設されている。立命館大学では、英語版 3.6 に日本語のパッチを当てて対応しており、時折日本語の文字化けが生じるが英語で書けばなんら問題はない。

[2] その他の BKC 副専攻科目には、ドイツ語コミュニケーション、フランス語コミュニケーション、中国語コミュニケーション、環境・マネジメント、スポーツ科学、教育学の 6 つがある。

[3] 詳しいシラバスについては、
http://webct3.ritsumei.ac.jp:8900/SCRIPT/BA000582/scripts/student/serve_syllabus.pl?START を参照されたい。

[4] 2001 年度はまでは、１セメスターあたり 13 回が基本とされていたが、文部科学省の指針に従い、2002 年度は 14 回、そして 2003 年度からは 15 回を必ず確保して授業をすることとなった。